「忘れられないこと」

第１６組養瑞寺　　水野　純明

　私は、50 年以上前の小学校６年生の時の出来事を、未だに映像のように思い出すことがあります。それは、同級生のＡ君に、こう言われたことです。

「オマエの家の仕事は、人が死んで喜ぶ商売や！」

「オマエは、人の不幸で飯を食わしてもらっとるんや！」

と。その時の私は、Ａ君に殴りかかるしかありませんでした。そして、

「こらえよ！辛抱しよ！」

と担任の先生に羽交い絞めにされて止められたことです。今、思うとその言葉は、Ａ君自身の言葉ではなく、きっとＡ君の家の大人が言っていたのだと容易に想像ができます。

　時は 50 年以上すぎていますが、未だ世間の持つお寺、僧侶のイメージに大きな変化があるとは思えません。むしろそのイメージは大きくなっていると思える時がよくあります。

　お寺も仏事も

「死ぬこと、死んでからだけの話ではない。“今・現在”を生きている自分の在り方を問題にする場や時間であること」

をご門徒の方々と共有・共感しているのか、していこうとしているのか、自信が無い自分がいます。

奇(く)しくも、昨年 10 月、ある教区の『宗祖親鸞聖人御誕生 850 年・立教開宗 800 年慶讃法要お待ち受け大会』の法話講師の梶原先生より

「新興宗教を求める人が多いのは、昨今の問題は、今の浄土真宗に魅力がないからだ。」

と胸にぐさりと刺さる厳しい指摘をいただきました。

「それぞれの時代を超えて人々を勇気づけ、救ってきた真宗の魅力とは何なのか。」

「親鸞聖人が顕かにされた浄土の真宗という真実の教えが、私の生きる支えとなっているのか。」

今一度、深く考えることが私たちに求められていると感じます。

　時代や社会の変化のせいにしてあきらめることなく、

「亡き人は、『死を見つめて“今“を大切に生きよ』と教えてくださる仏さまであること」

をご門徒のかたをはじめより多くの方々と共有し、<ruby>俱<rt>とも</rt></ruby>に歩むことができるよう、一歩でも前へ進みたいと思います。

　「本願」を受け止める「信心」に遠く、自身の身が定まらずウロウロ・オロオロしながら迷い続ける私ではありますが、だからこそ・・・・と思っております。